The Zoological Society of Japan

(昭和11年6月29日受領)

日本領内の狼に就てポコック氏に與ふ

(挿圖 1 個)

On the Corean Wolf again (an Answer to Mr. Pocock)

(One Figure)

阿 部 余 四 男

廣島文理科大學動物學教室

Yoshio Abe

Zoological Labolatory, Hiroshima University

Résumé

Mr. Pocock attempted (P. Z. S. London, 1935, Part III) to include the Corean wolf together with all the other forms of wolves in Chinese Tartary, Thian Shan, Kashmir, Tibet, Mongolia and China proper in *Canis lupus laniger* Hodgson. And as the basis of including the Corean wolf in *laniger*, he says that the skull size and pelage colour of it in my despription may fall into the individual variations among *laniger*. I clearly stated that *Canis lupus coreanus* Abe has as large a skull as *laniger*, and that in the pelage colour there is not a little variation, so that I do not take such points as diagnosis; but that it is recognized by its slenderer snout in comparison with *laniger* or any other middle sized or large sized wolves. So Mr. Pocock's protest is wide of the mark.

I measured my materials anew and two more skulls in Mr. Saito's collection (both formerly kept in Uyeno Zoological Garden alive) after Pocock's method, and I find more clearly that all our materials agree in the slenderer snout in comparison with all the *laniger* specimens which he showed: Width outside pm^2 being 35, 39, 40, 42 in the former and 47, 48 $\frac{1}{2}$, 55 $\frac{1}{2}$, in the latter, palate between pm^2 being 29, 29, 28, 30 $\frac{1}{2}$ in the former and 33, 35 $\frac{1}{2}$, 37 in the latter, palate between pm^1 being 26 $\frac{1}{8}$, 28, 28, 29 in the former and 34, 32, 31 in the latter, etc., as the table shows. Thus the gap between *C. l. laniger* and *C. l. coreanus* far exceeds the gap between his so called *C. l. rex* and N. E. Siberian wolf.

Sometimes north-eastern larger wolves may intrude into Corea over the frozen River Yalou, but such larger stragglers can neither be *laniger* nor nullify the existence of the peninsular form *C. l. coreanus*.

R. I. Pocock 氏は1935年9月發行の P. Z. S. London, Part III に東西兩半球の狼を同一種中の諸亞種として學名を論じて居る。氏が實際に調査したのは大英博物館所藏の狼丈であるが，同館の所藏そのものが狼に關してはあまり豐富なものでないので，あれで學名を整理したつもりなら隨分無理で，片手落ちであると言はれても止むを得ない樣である。予も Pocock 氏の見られた狼の頭骨の大部分は前に調べたことがあるのであるが 他地方の狼に關しては夫々その地方の標本を澤山持つて居られる方が何れ論議を呈出するものと思ふから，玆には日本領内の狼に關する範圍内丈で同氏の所說と私の考へとを對比して同學の士の教へを仰ぎ

ZOOL. MAG. (JAPAN), VOL. 48, NOS. 8-10, 1936.

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

たいと思ふのである。

I. 朝鮮狼の學名に就て 1930年に小生は朝鮮京畿道產の狼をタイプとして，朝鮮に *Canis lupus coreanus* なる亞種の存在を報じ，之は *Canis lupus laniger* HODGSON や *Canis lupus tschiliensis* MATSCHIE 其他の支那產狼に比べて大さはそれほど劣らぬにかゝわらず，吻の狹長型なる點に於て識別される亞種であると述べたのであつた。大英博物館には朝鮮の狼の標本は1個も無かつたので，私が日本から持つて行つた頭骨や脛骨を同所所藏の50個程の狼類頭骨と比較調査した上で私の結論は成り立つことを見た上のことであつた。毛皮の色には朝鮮の同士の間にも可なり趨異があるので特徵としては取らなかつたのである。然るに POCOCK 氏は西はトルキスタン，カシュミールから支那の諸地方にたてられた諸亞種を皆 *C. lupus laniger* HODGSON に合併して個體趨異であるとして"大英博物館の狼の標本は貧弱だが唯ひとつの例外は *laniger* の場合で，諸地方の標本が有り大なる個體趨異が知られる"と稱し，その餘勢をかりて朝鮮のも *laniger* に入れやうと言ふのである。併し氏が之等を皆 *laniger* に合併せんとする根據は中形の大さであるといふ以外にはないのであつて，朝鮮狼に就ても氏は1個の標本も見て居らずに唯私の記事丈を材料としたのであるが，私が特徵にも取らないといふ頭骨の大さを持ち出して，それ位の大さのは *laniger* にも有るとか私の記載の樣な毛色のものが北支の標本にも有つたといふ丈であつて，私が特徵として取つた吻の狹長型の點には一言も批判して居らぬのである。前臼齒などの大さが 1mm やそこら異るといふ丈で新亞種をたてる程慧眼な氏のことであるから，私のタイプを同館に寄贈してさへ來たら，氏も一見して私の考へを承認したのであつたらうかと思はれる。

扨て氏は *laniger* の個體趨異は大英博物館の標本丈でもよく代表されて居るとして測定表を示して居られるから，之と氏の未だ見たことのない朝鮮狼を氏と同法に從つて再測定した表とを並べて見れば，私の特徵とした所が果して *laniger* の個體趨異內に入るべきものか否かが一番わかり易いと思ふ。幸に私の前に測定したものの外に齋藤弘氏が上野動物園で永く飼つたことのわかつて居る素性正しい朝鮮狼の2頭骨を持つて居られるのでそれをも同じ方法で測つて頂いた。その結果は別表の通りであつて，頭蓋全長 240 mm 內外の個體で比較すると，犬齒部上顎幅が *laniger* の 44, 45, 48mm に對して，朝鮮の *coreanus* では 38, 39mm であり，pm^1 部口蓋幅は *laniger* の 31—34mm に對して *coreanus* では 28—29mm であり，pm^2 部口蓋幅に於ては *laniger* の33—37mm に對して *coreanus* では29mmである。pm^2 部上顎幅では *laniger* の47—55½mm に對して *coreanus* では 40, 42mm である。そして m^1 や m^2 の部位になると兩亞種で略等しい幅を有するのである。此事は齋藤弘氏所有の頭蓋全長220mm 位の者では吻の狹い部はやはりそれに準じて一層狹く，そして m^1 や m^2 の部位の幅は大して大きな個體に於けると變らない爲に一層著しい對立となるのである。兎に角素性のはつきりした4個の朝鮮狼の標本がよく一致し，POCOCK 氏が個體趨異がよく代表されて居るといふ大英博物館の全 *laniger* 標本との間にこれ丈のギャップが有るのだから，私が朝鮮に *Canis lupus coreanus* なる亞種の存在を主張しても不可はないと思ふのである。

起原に就て考へて見ても，西部アジアの狼は東歐・西シベリアの大形狼の南下して小さくなつたものと考へるとすれば，朝鮮狼は北東シベリア方面から南下して半島化して亞種が出來

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

產地及び性	所藏者	頭蓋全長	底長（髁を含む）	口蓋長	▲犬歯部上顎幅	▲犬歯部口蓋幅（縫合線に沿ひて）	▲pm¹部口蓋幅	▲pm²部口蓋幅	▲pm²部上顎幅	pm³部上顎幅	m¹部上顎幅	m²外側間幅	顴骨弓幅	下顎長	測定者	備考
N. China, 熟	大英博	225	211	104	44			34					123	170	Pocock	
Chin King, 青熟	〃	220+	205	106	37			35					110	—	〃	
"Nepal" (Hodgson), 熟♂	〃	268	237	120	50			38					140	188	〃	
〃 (Zool. Soc.), 老♂	〃	220	206	105	46			34					124	159	〃	
Chang Chimmo, Kashmir,	〃	227	*{(211?) 221	107	42			34					135	174	〃	
Ladakh, 〃 熟	〃	218	206	101	41			32½					126	162	〃	
Gilgit, 〃 熟♂	〃	235	218	104	43			33					123	173	〃	
Chitral, 〃 ♂	〃	233	221	109	42			*{(33?) 23					116	174	〃	
〃 〃 老♀	〃	239	220	110	48			35					127	171	〃	
Thian Shan, 熟♂	〃	235	—	107	43			34					135	175	〃	
〃 幼若	〃	225	210	104	44			32					111	162	〃	
Shensi, 青熟♂	〃	243	224	112	45	27	34	37	48½	61	77	65	123	179	〃	{*C. l. tschiliensis* との Thomas の鑑定
Scanrdo, Kashmir, 熟♂?	〃	239	225	111	44	29	32	35½	47	58	76	66	133	178	〃	
Chinese Tartary, 老♂	〃	239	—	106	45	29	31	33	55½	*{(61?) 71	71	62	128	175	〃	{*C. Chanco* Gray の type
朝鮮, 京畿道, 熟	阿部	240	221	111	39	24½	23	29	40	54	68	62	119	174	阿部	{*C. l. coreanus* Abe の type
〃 〃 熟	〃	240±	218	112	38	25	29	29	42	55	70	64	122	172	〃	
〃 青熟♂	東京大		204		33								110	160	〃	
〃 熟	京城普		217		38								122	170	〃	
〃 熟♂	齋藤弘	220	190(+15)	104	37½	22⅓	26⅓	28	35	54	68	57±	118	159	齋藤弘	
〃 熟♀	〃	219	195(+15)	107	38	25½	23	30½	39	60	73½	63½	121	157½	〃	

* 誤植かと思はれるもの，（ ）内は正誤のつもり

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

たものであらうと考へるのが自然であるが，北方亞細亞に丈でも3亞種を認める Pocock 氏が，何故中帶アジアには東西に亙つて廣汎な地域の狼を *laniger* 亞種丈としなければならぬ理由があるのであらうか，おかしい。

今日でも冬季に鴨綠江が氷に閉されれば北方の大形の狼が朝鮮北部に侵入せぬとは斷言が出來まいと思ふが，その侵入個體が多くない爲めに *Canis lupus coreanus* の型を消滅せしむるに到らないのであらう。そしてその北方から河を渡つて來る侵入の徑路を考へると，やはり西方の人家の多い平野では入りにくくて沿海州や東寄りの地方から山地に入り込む者の方が生き永らへる機會の多かるべきこともより合理的であらう。たとひそれ等の大きな狼が朝鮮に生き永らへて捕へられても，それは中亞の *laniger* ではなくて東部シベリア系の者であるであらう。どちらにしても中形の狼丈が東西に亙つて1亞種でなければならぬとする樣な Pocock 氏は誤つて居る。

2. 北海道の狼の學名に就て 北海道の狼は今では絶滅して仕舞つたことは八田博士や犬飼博士のいふ通りであらう。大英博物館にも1886年11月28日に Anderson 氏が入手した1頭骨が有る丈で，他には札幌大學の博物館に2個の剝製が有るきりではないかと思はれる。想像丈で言ふならば，北海道は動物地理學上永く隔離された島で，他地の狼との混血は不可能なわけであるから，何等かの特徵のある新亞種になつて居りはしないかといふことは何人も頭に浮ぶことである。併し苟くも新學名を付けるといふ以上は，地理學的な想像丈では不可なのであつて，はつきりした形態學的な特徵をつかまなければ良心が許さぬのである。所が何分狼の毛皮の色には個體變異が可なり大きいし，頭骨は1つきりないのにその頭骨は大さのみならず，重要な pm^4 や m_1 の大さに於てさへ東北シベリア產の1頭骨とは可なり一致點の多いものであつた。その東北シベリアの頭骨が又1個きり大英博物館にも無いといふ有樣で，何分シベリアの狼の標本は同館にも誠に貧弱なものであつた。

所が今度 Pocock 氏はその貧弱な材料を土臺として北海道の狼に *Canis lupus rex* といふ新學名を付けて新亞種としたのである。その特徵として述べて居る所がまた却々やゝこしいのであつて，頭骨の大さや截肉齒の大さは原亞種と同じ位だが，前臼齒殊に下顎の前臼齒がやゝ大きいといふのである。本當は原亞種のみならず，カムチヤッカ邊の *Canis lupus dybowskii* Domaniewski とも區別がなければならぬわけなのである。どれ程大きいのかと云ふと下表の樣に ½mm 乃至 1mm も大きいと言ふのである。

	Canine (at base)	pm^2	pm^3	pm_2	pm_3	pm_4
Russia (*lupus*), ad. ♂?	15½	14	16	13	14	15½
N. Spain (?*signatus*), subad. ♂	14	15	17	13½	15	17
Kolymer River(?*dybowskii*), ad. ♂?	15	15½	17½	—	—	—
Yeso (*rex* type), ad. ♂?	15	16½	18	14	15	18

氏も少し氣がとがめたと見えて，實際見ると齒が大きい事が目につくが數字で表して見るとそれ程でもないと言つて居るが，全く pm^2 に於て 1mm，pm^3 に於て ½mm といふ樣な差に過ぎないのである。截肉齒 (carnassial teeth) の大さは往々分類上の議論になるので大抵の人が測つて居るが，北海道の狼はその點では他と分ち得ないのである。pm^4 や m^1 や m_1 に

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

4—5mm の個體趨異さへある狼に於て，pm^2 や pm^3 に 1mm や $\frac{1}{2}$mm の個體趨異がないことはない筈で，それを新學名に値する特徴とすることは砂上に樓閣を築く樣なものではあるまいか。而も其人が一方に於てはアジア中帶の先人の諸亞種をば皆個體趨異で片づけやうといふのであるから驚くべき話である。

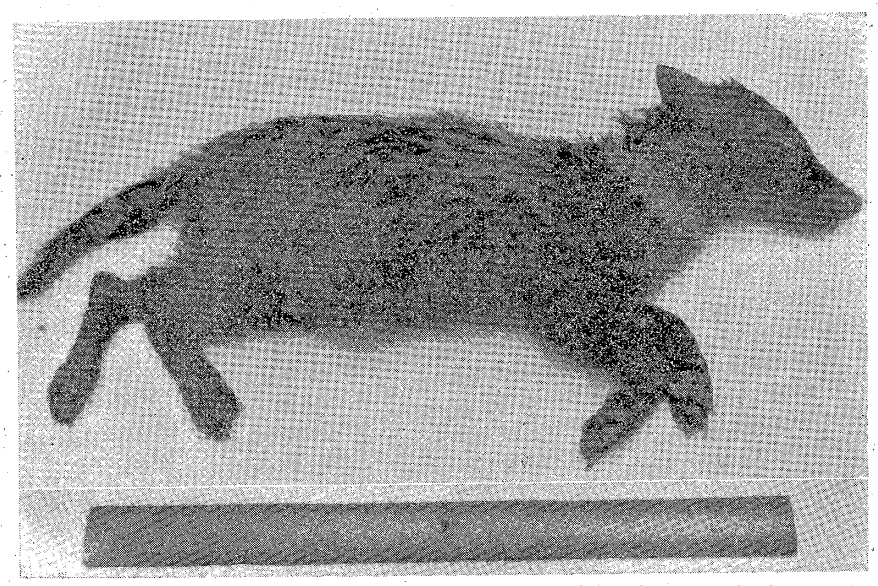
3. 本州の山犬に就て Pocock 氏は之をも狼中の1亞種として *Canis lupus hodophylax* Temminck の學名を採用して居る。元來狼類と言はれたものの内で最も北歐の狼の典型に遠いものは，第一は北米南部の Coyote 卽ち *Canis latrans* Say 群で，次は日本の山犬卽ち *Canis hodophylax* Temminck であるとは衆目の一致せる所である。Coyote をば氏も *C. lupus* 中に入れて居らんのは，1つには大英博物館に1つの頭骨さへ無かつたせいもあらうが，之は亞屬を別にする人もある位だからまあ宜しい。そこで次に本州などの山犬の學名が *Canis lupus hodophylax* Temminck が良いか *Canis hodophylax* Temminck が良いかと言ふ番になるわけであるが，それは極く僅かの考へ方の違ひで分れて來るのを免れない程度の境目のものである。南印度やアラビヤ邊の *Canis lupus pallipes* Syke の樣に，單に小形の狼だといふ違ひばかりではなく，小形な上に皷骨胞が妙に押しつぶされた樣に小さく（之は耳の小さいことと關聯せる現象であらうかと思はれる），體長の割合に脚が短くて毛皮の色も黑ずんで居るものが多いといふ樣な點もあるので，獨立種として *Canis hodophylax* Temminck として居る人の多いのは決して無理なことではないのである。併し起原から言へばやはり狼の島嶼化して生じたものと考へる外に求むべき根源の動物がなさそうである。

Pocock 氏に感謝すべき事は，1905年1月23日に大和の鷲家口で Anderson 氏が入手した山犬の若牡の毛皮（Thomas 氏が黑ずんだ毛色のものとして同年に報告して居るもの）が今も大英博物館に存在することを知らして下れたことと，私が調べた時には見當らないで困つた秩父產（1886年）としてあつた山犬の下顎を探し出して下れて，その下顎長が 152mm で下第1臼齒長が 27mm なることを報じて下されたことである。これで山犬の下顎長は前述の大和の若牡の 140mm は別として，152mm，155mm（ライデン），157mm（ベルリン）の4例がわかつたわけで，それに長谷部博士が石器時代から檢出されたのがやはり 150mm（大洞），155mm（硯塚）であるから，山犬の頭の大さといふものは石器時代でも近代でも先づそれ位のものが多いといふ見當がついたわけである（附記參照）。長谷部博士は硯塚貝墟のは臼齒長が大きいといつて *Canis ohokami* といふ新種であるとして居られ，「日本犬」誌上で近頃も齋藤弘氏と論爭して居られ，前に私とも同じ樣な論爭をしたことがあつた。博士があれを山犬と別種だと主張されるのには山犬なるものは家犬の野生化したものだらうといふ御考へがあるからでもあるらしい。成る程俗人が山犬だと言つた内に家犬の野生化したものもあつたであらうことは爭はれない。斑の山犬といふ樣な圖などはそれであらう。併しその樣な似て非なるものの外に，上述の樣な本來の野生種たる山犬も棲んで居つたことが確かであるし，而もその下顎長が多くは 150mm 臺のものであることが確實だと御納得がゆかれる以上は，博士も同じ樣な下顎長の，外形上見わけられない樣な山犬類が2種類同じ本州に棲んで居つたと考へるよりは，それが *Canis hodophylax* といふ同一種で，齒の大さ上の多少の差は北方の狼にもよく見る所の個體趨異であると考へる方に御贊成下さるであらうと思ふのである。

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

野生化したる家犬でない所の本當の山犬は，今でも必ずしも絶滅し盡したものと斷言するのは早計らしい點もあるのであつて，例へば昭和7年の夏に大臺敎主田坂政一氏が拾得して浪速高校の茂木氏が讓り受けたといふ仔獸の寫眞を送られたが，之などはどうも貉の仔とは見えず山犬の仔然たるものであつた。このものはその内に實物を拜見しやうと思つて居る。



昭和7年夏，大臺敎主田坂政一氏が紀伊山脈で拾得したる仔獸の寫眞，山犬の仔ならずやとて岸田日出雄氏より送られたもの

なほ POCOCK 氏は1936年の S. Z. S. L., Part I にシベリアヤマイヌ（赤狼）卽ち *Cuon* 屬のものを全部1種中の諸亞種とした分類を發表して4新亞種を建設し，從つて舊來 *Cuonalpinus* PALLAS とされて居つた朝鮮などのものを *Cuon javanicus alpinus* PALLAS として居られる。此件に就ても私は先月樺太の北貝墟からの出土獸骨を瓜田友衞氏から送られた中に，家犬2疋の下顎の外にシベリアヤマイヌの下顎1個を檢出し得たのを機會として一言したいことがあるのだが，頁數が足りぬからそれは次稿に讓る。

文　獻　ABE (1930) Journ. Sci. Hiroshima Univ., Ser. B, Div. 1, **1**, 33—36. GRAY (1863) P. Z. S London, 1863, p. 93 and 501. HASEBE (1924) Arbeit. Anat. Inst. Univ. Sendai, **10**. HODGSON (1847) Calcn Journ. Nat. Hist., **7**, 474—477. MATCHIE (1907) Filchner Exp. China-Tibet, Zool.-Bot. Erg., **4**. 152. NEHRING (1886) Zoologist, Jan., 1886. POCOCK (1935) P. Z. S. London, 1935, part III, 647—686. 齋藤弘 (1936)「日本犬」5 (4). SCLATER (1874) P. Z. S. London, 1874, 654—655. TEMMINCK (1845) Fauna Japonica: Mammalia, 38. THOMAS (1905) P. Z. S. London, 341.

附記——本稿を終へた後に齋藤弘氏は弘前市の中畑家から下顎長155.5mm，下第1臼齒長25mm の山犬頭骨，同市古山家から下顎長 170mm，下第1臼齒長27mm の山犬頭骨を見出し，又科學博物館にも山犬1頭分の骨骼を見出したことを報じたので，本とうの山犬卽ち日本狼が近世まで野生したことはますます確かになつた。

NII-Electronic Library Service